

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370719

研究課題名(和文) 意味重視の読みと言語形式への注意

研究課題名(英文) Reading for meaning and attention to form

研究代表者

名部井 敏代(Nabei, Toshiyo)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：20368187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語学習者が意味理解を主な目的に英文を読む際、言語形式(form)にも注意を払うかという課題に焦点をあて、(1)多読を経験する学習者は一般の学習者と比べて、意味中心の読みをするのか、(2)読解時の困難を仮想した空所を解決する際に学習者が用いる認知的方略に、多読経験の有無で違いがあるかの2点を研究課題とした。

研究の結果、多読学習者に一般の学習者よりも読解能力テストで有意な差のある伸長が認められた。英文読解の過程におけるformへの注意や文脈に照らしたformとそれが内包するmeaningの判断には多読経験の有無に関わらず学習者の英語能力で違いがあることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This research aimed to discover the mental processes Japanese learners of English go through when they read and comprehend English passages: more specifically, whether they pay attention to linguistic (grammatical) forms as well as vocabulary while they read for meaning.

The results showed that (1) those who experienced extensive reading made significant growth in comparison to their counterparts, and (2) in the process of reading comprehension, the learners' proficiencies influence their ability to pay attention to "form" (e.g., lexical and morpho-syntactic features) and also their ability to evaluate the appropriateness and relevance of their linguistic interpretation in relation to the meaning and context of the given text.

研究分野：第二言語習得

キーワード：フォーカス・オン・フォーム 意味中心の読み 読解方略 think-aloud languaging 気づき クローズテスト

1. 研究開始当初の背景

意味伝達を重んじた目標言語による大量のインプットに触れる多読活動が、第二言語習得を促進しているという報告がある。**Graded Readers** を用いて難易度が自らのレベルにあった読み物を多く読ませようとする多読指導は、**Krashen (1982)**の理解可能なインプット仮説を基盤にしており、過剰な演繹文法指導を否定しているにも関わらず、学習者が自らのペースで自らのレベルに見合った読み物を多く読むことで語彙力および文法力を身につけていることが報告されている (e.g., 酒井&神田, 2005)。多読研究における成果は大変興味深いものの、これまでの多読研究者による調査が明らかにしたのは結果のみで、多読活動を通じての学習者の学びの過程は明らかになっていない。よって、それを明らかにする必要性があると考えられた。

「多読による学習過程の解明」というテーマに取り組むことは、第二言語教育研究における二つの大きな課題に貢献する可能性がある。まず、多読を通じた学習経験を学習者視点による自己報告という手法で集めることが、この分野の先行研究に新たなデータを加える意味で重要だと考えられる。「教室内インタラクション研究」では、学習者による自己報告の手法を用いたデータ収集が多く行われるようになってきた。例えば、口頭インタラクション時における学習者の気づきのパターンを知る手だてとして刺激想起インタビューなどが用いられている。話し言葉によるインプットに対する学習者の気づきに関するデータが集まっている一方、書き言葉によるインプットに対する気づきのデータは殆どない。異なるチャンネルによるインプットに対する学習者の気づきのデータが集まれば、それぞれの学びの過程を比較することが可能になると考えた。

本研究が第二言語教育研究でもう1つ貢

献できることは、第二言語習得研究で論じられている暗示的 vs. 明示的学習の議論に新しいデータと考察を加えることである。

Krashen の理解可能なインプット仮説 (1982) は明示的な学習を否定している。しかし、**Schmidt** などの認知的立場をとる研究者は、全ての学びには学習者の認知的関与—すなわち学習者の注意—が必要だと論じている (e.g., **Schmidt**, 1990)。教室内インタラクション研究でも、学習を促進すると考えられる資源 (インプットや教師からのフィードバック) にどのように注意を向けるか、認知的立場から研究をしている。**Krashen** が論じるような意味理解を主目的にした学習活動で、学習者が実際にどのような認知的活動を行うのか—すなわち、何かに注意を払うことがあるのかどうか、もし注意を払うのなら、それは何に対してなのか—を解明することは、第二言語習得研究で行われている暗示的 vs. 明示的学習の議論に一石を投じる可能性があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、自らのレベルに合った興味を持つ読み物を独力で読む学習者 (多読学習者) と、コースが指定する読み物を独力で読む学習者 (一般英語学習者) が、それぞれどのように **L2** インプット (すなわち英文テキスト) に関わっているのか、学習者の自己報告を中心にした質的データを収集・分析して、リーディング学習を行う学習者の認知的活動について理解を深める探索的調査を行うことを目標とした。具体的には、次の課題を掲げた:

- (1) 多読経験がある学習者は、そうでない学習者とくらべて、読みの能力に向上がみられるか?
- (2) 多読経験がある学習者は、そうでない学習者と比べて意味重視の読み方をするか?
- (3) 読解時の困難を仮想した空所補充の問題を解決する差異に学習者が用いる認知的方

略の特徴に、多読経験の有無で違いはあるか？

3. 研究の方法

本研究は、多読指導を行う英語リーディングコース（以後、多読クラス）4クラスと一般的な英文講読指導を行う英語リーディングコース（以後、一般クラス）1クラスの計5クラスでリーディング学習をする大学1・2年生を対象に実施された。

本研究で収集したデータは、対象コースを受講する学習者対象に2014年度開始時（4月）と終了時（1月）に行った同一のクローズ形式の英文読解能力テスト（EPER）のスコアと、受講生の中で授業時間外の調査に自主的に参加を決めた学習者40名の個別面談での発話想起法（think-aloud protocol）を用いた読解タスクのパフォーマンスとインタビューへの回答であった。自主参加の学習者に対する個別面談は、春・秋2学期中に5回行われ、学習者はそれぞれ与えられたクローズ形式の読解タスク（事前・事後テストに用いた読解能力テストと同形式）に、発話想起法で自身の読解中の考察や思いを言葉にしなが、取り組んだ。インタビューでは、学習者の英語学習に対する態度や考え、これまでの英語授業や調査当時履修している英語授業での経験や態度、意識などを問うた。

なお、分析の対象としたデータは、まずは個人面談に参加した40名から収集した事前・事後の英文読解能力テストのスコアと個人面談収集した談話データであった。事前・事後テストのスコアは、多読クラスからの参加者（多読グループ）と一般クラスからの参加者（一般リーディンググループ）とで比較する統計的分析を行った。また、個人面談で収集した think-aloud protocol データとインタビューの談話データは、文字に起こし NVivo version 11 を用いて探索的なテーマ分析を行った。なお、この談話データ分析では、5回の面談全てに参加して5種類の読解タ

スクを行った26名の think-aloud protocol が対象になった。

4. 研究成果

(1) 多読経験がある学習者は、そうでない学習者とくらべて、読みの能力に向上がみられるか？

本研究で行ったリーディング指導結果を理解するため、まず EPER による事前・事後テストの結果を、統計的に分析した。多読グループと一般リーディンググループの事前テストと事後テストの差を伸び (growth rate) とし、独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、伸びに関しては多読グループと通常リーディンググループの平均点の差は優位であるという結果となった ($t(22) = -2.486, p < .05$)。

本研究のデータセットでは、一般リーディンググループの人数が少ないため、ノンパラメトリックテストであるマン・ホイットニー U 検定 (Mann-Whitney U Test) も使って分析をした。結果は、一般リーディンググループ（中央値 = 9, $n = 7$ ）、多読グループ（中央値 = 18, $n = 15$ ）、 $U = 26, Z = -2.134, p < .05, r = 0.46$ となった。通常リーディンググループと多読グループの中央値に有意な差が見られた。なお、多読グループの中に2名のデータはないため、欠損値扱いとしている。

事前事後差

Group	度数	中央値
1	7	9.00
2	17	18.00
合計	24	14.50

検定統計量^a

	事前事後差
Mann-Whitney の U	26.000
Wilcoxon の W	54.000
Z	-2.134
漸近有意確率 (両側)	.033
正確な有意確率 [2*(片側有意確率)]	.034 ^b

a. グループ化変数: Group

b. 同順位に修正されていない。

(2) 多読経験がある学習者は、そうでない学習者と比べて意味重視の読み方をするか？

(3) 読解時の困難を仮想した空所補充の問題を解決する差異に学習者が用いる認知的方略の特徴に、多読経験の有無で違いはあるか？

参加者が読解タスクを行っている際の think-aloud protocol を分析した結果明らかになったことは、主に次の点である：①比較的高い読解能力をもつ学習者には、内容理解を主眼に読み進めるスタイルの者と、言語的知識（いわゆる明示的な語彙や文法知識）を内容理解に応用しながら読むスタイルの者がいる。②いずれのスタイルも、言語的知識を必要に応じて内容理解に用いる術をもっている。③中級の読解能力の学習者は、言語的知識を内容読解に応用する術に乏しく、むしろ不完全な文法知識のため却って誤った内容解釈に陥ることがある。

本研究の think-aloud protocol データの分析で現れたのは、学習者が用いる認知的方略の種類や頻度の差は、経験しているリーディング学習の指導形態よりも学習者本人の英語運用能力に関係している傾向である。つまり、より英語運用能力が高い学習者のほうが、Swain, Kinnear & Steinman (2011)が社会文化理論の視点から提唱する languaging をより多く産出することができるというこ

とである。Languaging は、自らの理解を言葉にすることで、次の思考・考察-すなわちテキストの内容理解や空所補充に立てた仮説の検証-を、より堅実に進めることを可能にしている。言い換えるならば、languaging ができる学習者は次のレベルの学習に続く手がかりを得ていると考えられる。

読解スタイルの分析を通して、多読経験がある学習者に意味重視の読み方をしている傾向は示唆されたが、今回の研究期間内に多読経験者特有の読解過程の特徴をまとめることはできなかった。これは、多読グループ全員の think-aloud protocol の分析を完了させることで、明らかにすることができると考えている。

一方、一般リーディンググループの学習者の中に、慣用句などを含む語彙や形態素・構文といった「form」に捕われすぎるあまり、テキストの内容理解から乖離してしまうケースを見つけた。このケースについては、演繹的な文法指導を行いがちな中学・高校での英語指導に関係があるかもしれず、期間内に分析が終らなかったインタビューデータとも関連させて、更に分析をする必要があると考えている。

本研究で明らかになった学習者の読解活動中の言語知識活用のスタイルは、中学・高等学校における語彙・文法指導のあり方を再考する上で意義がある。近年、言語活動に統合された文法指導が提唱されているが、本研究の結果はこれを支持するものとなった。語彙・文法知識を、独立して学習するアイテムとして導入・教授するのではなく、意味内容を表現するための言語形式として指導するフォーカス・オン・フォーム指導法について、より実践的な教授法の探求・考察の必要性が明らかになったと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

水本篤, 脇田貴文, 名部井敏代 (2017) 「関西大学英語入試問題データの分析 -テスト理論の活用を目指して-」『データ分析の理論と応用』Vol. 6, No. 1. 21-29 頁. (査読有)

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

名部井 敏代 (NABEI, Toshiyo)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：20368187

(2) 研究分担者

吉澤 清美 (YOSHIZAWA, Kiyomi)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：80210665